

エレミヤ書31章23節－33章「主の下さる夢」

1A 植え直されるエルサレム 31

1B 魂への潤い 23－30

2B 新しい契約 31－40

2A 信仰による行動 32

1B 土地の購入 1－15

1C 包囲 1－5

2C 代金の支払い 6－15

2B 祈り 16－44

1C ついてゆかない知性 16－25

2C 不可能のない神 26－44

1D 怒り 26－35

2D 回復 36－44

3A 理解を超えた大いなる事 33

1B 廃墟から喜びへ 1－13

2B 永続するダビデの王座 14－26

本文

エレミヤ書 31 章を開いてください、23 節から読んでいきます。31 章の前半では、主が捕囚によって息子から別れてしまう女たちの嘆きが書いてありました。そして、イスラエルが自分たちの犯した愚かさを恥じて、確かに主から懲らしめを受けていることを認めています。そこで主が、はらわたを戦慄かせて、「わたしは彼をあわれませるにはいられない。(31:20)」とされています。そして、捕え移される時は、その歩む大路に標識を付けておきなさいと言われる。なぜなら、捕え移されてもまた帰還することができるからです。戻ってくる時の道しるべを付けなさいということです。そして、慰めの言葉を 22 節でかけておられます。「裏切り娘よ。いつまで迷い歩くのか。主は、この国に、一つの新しい事を創造される。ひとりの女がひとりの男を抱こう。」主が、この国に一つの新しいことを創造される、と言われる。新しい創造です、私たちがキリストにあって新しく造られた者ではありますが、その創造を神はエルサレムの町に対して行なわれます。それを、「ひとりの女がひとりの男を抱こう。」とありますが、主の真実な愛によって守られ、かむまわれ、慰められるということです。

1A 植え直されるエルサレム 31

1B 魂への潤い 23－30

31:23 イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「わたしが彼らの捕われ人を帰らせるとき、彼らは再び次のことばを、ユダの国とその町々で語ろう。『義の住みか、聖なる山よ。主があなた

を祝福されるように。』31:24 ユダと、そのすべての町の者は、そこに住み、農夫も、群れを連れて旅する者も、そこに住む。31:25 わたしが疲れたたましいを潤し、すべてののしぼんだたましいを満たすからだ。31:26 ..ここで、私は目ざめて、見渡した。私の眠りはこちよかった。..

主が捕われ人を帰された後、ユダの国々、その町々をどうするかについて語られています。「義の住みか、聖なる山よ。主があなたを祝福されるように。」とあります。ここに、大きな神の恵みがあります。彼らには義はありませんでした。そして聖さありませんでした。しかし主が恵みをもって、彼らに義と聖の賜物を与えてくださっているのです。私たちは、キリストにあってこの恵みを個々人が受けています。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」主は私たちに、義と聖という新しい人をくださいました。それをしっかり着物のように身に付けることが、私たちの今の歩みです。

そして、町には農夫もおり、羊や牛の群れもおり、旅人も住むことのできるほど安全です。そして魂の疲れは、罪による反発や反抗から来ています。それが取り除かれるので、休息が訪れます。同じように、気落ちするのは人の罪の性質によるもので、期待が裏切られます。しかし、それもないので、希望が失望に終わることがありません。それから、エレミヤはこれらの言葉を、夢あるいは幻の中で見ていたことが分かります。目覚めています、すると心地よかったとあります。これまでは、涙と嘆きの中に生きていた預言者の一時の休息だったことでしょう。

31:27 見よ。その日が来る。..主の御告げ。..その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家に、人間の種と家畜の種を蒔く。31:28 かつてわたしが、引き抜き、引き倒し、こわし、滅ぼし、わざわざいを与えようと、彼らを見張っていたように、今度は、彼らを建て直し、また植えるために見守ろう。..主の御告げ。..

そうです、主がエレミヤを召された時にも、彼がエルサレムの引き抜き、引き倒し、滅ぼし、災いを預言しなければいけないことを教えられました。しかし、それには明確な目的があります。それは、建て直し、再び植えること、これの目的があるからです。そして、ものすごく大事なものは「時」があることです。神は時を定めておられ、その時における取り扱いを決めておられます。災いを決めておられる時は災いを与えられますが、ご自分の怒りや正義がすべて満たされたとみなして、今度は幸いを与えるとお決めになっているのです。

使徒パウロが、キリストの十字架についてこう話しています。「ローマ 3:25-26 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義

であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」主がご自分の怒りを、キリストの十字架の時に現わすことを決めておられました。そしてその怒りが満たされた今、この方を受け入れる者に怒りが来ることは、決してありません。主は、御怒りの時代をキリストにあって過ぎ去らせたのです。

31:29 その日には、彼らはもう、『父が酸いぶどうを食べたので、子どもの歯が浮く。』とは言わない。31:30 人はそれぞれ自分の咎のために死ぬ。だれでも、酸いぶどうを食べる者は歯が浮くのだ。

これは当時あったことわざだったのでしょう。父のしたことが、そのまま子が被らなければいけない、という意味です。帰還する約束をもらった捕囚の民は、それでも先祖たちの罪を自分たちが受け継いで、呪いを受けるのだと、トラウマのように恐れていたに違いありません。しかし、主は、「もしあなたがたが同じ罪を繰り返すのであればそうだが、自動的に呪いを受けるのではない。」と断言しておられます。エゼキエル書において、この諺についての詳しい説明が書かれています。各々がそれぞれの行ないに対して報いがあり、父から子に受け継がれるのではない、ということをお話しています(18章)。私たちは、キリストにあって新しく造られたのですから、過去の災いを今に運命のように引きずることは決してないのです。

2B 新しい契約 31-40

31:31 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。…主の御告げ。…31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。…主の御告げ。…わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。31:34 そのようにして、人々はもはや、『主を知れ。』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。…主の御告げ。…わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

新しい契約の約束です。ここで大事なのは、「新しい」ということです。そこには、新しい創造という意味合いも含まれるし、完全に新たに作る、という意味合いもあります。神が、ご自分の民との関係において、全く新しく取り扱われるということです。それが午前礼拝でお話したことです。第一に、「人が神に従順になることが条件」ではなく、「神が人に真実を尽くす」ことが基になっていることです。自分が何をしたかということではなく、神が自分に死んでいる者たちに対して何をしてくださるか、ということでもあります。第二に、「内側からの変化」です。私たちが何をしても、内側が変わっていなければ、ますます罪の深みにはまっています。それを神は内を一新してくださることによって、私たちが神に喜ばれるようにしてくださいます。そして第三に、「全ての人」ということで

す。キリストにあって、差別なく、全ての人がこの恵みにあずかれます。そして第四に、全ての罪が赦されます。二度と思い出されもしません。永遠の赦しです。

31:35 主はこう仰せられる。主は太陽を与えて昼間の光とし、月と星を定めて夜の光とし、海をかき立てて波を騒がせる方、その名は万軍の主。31:36 「もし、これらの定めがわたしの前から取り去られるなら、..主の御告げ。..イスラエルの子孫も、絶え、いつまでもわたしの前で、一つの民をなすことはできない。」31:37 主はこう仰せられる。「もし、上の天が測られ、下の地の基が探り出されるなら、わたしも、イスラエルのすべての子孫を、彼らの行なったすべての事のために退けよう。..主の御告げ。..

新しい契約について、31 節で、「イスラエルの家とユダの家とに」結ぶとあったことに注目してください。新しい契約は、異邦人である私たちに対するものではない、イスラエル人に対するものがあります。しかし、主が血を流されたことによって、私たち異邦人も神に近づくことができるようになり、御霊によってユダヤ人も異邦人も一つとされたキリストの体に属しています。アブラハムへの祝福が、キリストにあって異邦人にも及んでいるのです。けれども、元々がイスラエルに対するものですから、神は必ず国民として彼らに、新しい契約をもって臨んでくださいます。

ここにあるのは、いつまでも続くということ、恒久性です。ローマ 11 章 1 節にありますが、イスラエルの民が福音を拒んだから、彼らは見捨てられたのか？絶対にそうではない、というパウロの断言があります。そして現に、イスラエルの民は、紀元 70 年に祖国を失い、歴史を通じて迫害と虐殺を受けてきたにも関わらず、存続し、存続するだけでなく国まで建て上げました。そこには、神の堅い約束があったのです。もしユダヤ人を抹殺したいなら、太陽や月を破壊しなければいけません。しかし主は、彼らを見捨てられません。これは、私たちに対する永遠の救いの約束でもあります。天地の法則を立てておられる神が、必ずわたしはあなたを救うと約束されたのです。

31:38 見よ。その日が来る。..主の御告げ。..その日、この町は、ハナヌエルのやぐらから隅の門まで、主のために建て直される。31:39 測りなわは、さらにそれよりガレブの丘に伸び、ゴアのほうに向かう。31:40 死体と灰との谷全体、キデロン川と東の方、馬の門の隅までの畑は、みな主に聖別され、もはやとこしえに根こぎにされず、こわされることもない。」

主の約束されていることが、抽象的なもの、雲を掴むような中身のないものでは全くないことを主は教えられています。再臨の主がなされることは、具体的なものです。エルサレムがここにあるように回復します。ネヘミヤ記にハナヌエルのやぐら隅の門が出てきますが、エルサレムの城壁の北東から西廻りで測り縄が伸びています。それから北西に行ってから、南に行き、そして死体と灰の谷つまりヒノムの谷、そして再び東に来たので北上してケデロンの谷です。これらの中に、死体のような、汚れているとされているところも含まれます。けれども、それらもすべて聖別するという約束です。私たちに対する主の新しい創造が、実生活、具体的なところで目で見える形でも見える、

という、生きた証しを、私たちはそれぞれ持っているはずです。

2A 信仰による行動 32

そして 32 章において主は、これらの幻に対して具体的に、信仰による行動を起こされるようにエレミヤに促されます。

1B 土地の購入 1-15

1C 包囲 1-5

32:1 ユダの王ゼデキヤの第十年、すなわち、ネブカデレザルの第十八年に、主からエレミヤにあったみことば。

時はゼデキヤが王であった時で、その終わりの時です。彼は自分の治世第九年の時にバビロンに反逆したため、バビロンはエルサレムを包囲しました。その間、バビロンは壘を築いて、城壁を越えて中に入る準備をしていましたが、エルサレムの中では皆が飢えて苦しんでいました。そして、第十一年に城壁が破られ、ゼデキヤは逃げますが捕まえられます。ですから今は、包囲が始まってから一年ぐらい経った時です。そしてエルサレムが破壊される一年前ぐらいの時です。

32:2 そのとき、バビロンの王の軍勢がエルサレムを包囲中で、預言者エレミヤは、ユダの王の家にある監視の庭に監禁されていた。32:3 彼が監禁されたのは、ユダの王ゼデキヤがエレミヤに、「なぜ、あなたは預言をするのか。」と尋ねたとき、エレミヤが次のように答えたからである。「主はこう仰せられる。『見よ。わたしはこの町をバビロンの王の手に渡す。それで、彼はこれを攻め取る。32:4 ユダの王ゼデキヤは、カルデヤ人の手からのがれることはできない。彼は必ずバビロンの王の手に渡され、彼と口と口で語り、目と目で、彼を見る。32:5 彼はまた、ゼデキヤをバビロンへ連れて行く。それでゼデキヤは、わたしが彼を顧みる時まで、そこにいる。…主の御告げ。…あなたがたはカルデヤ人と戦っても、勝つことはできない。』」

バビロンに包囲されている時、エレミヤは王の家のあった監視の庭に監禁されていました。その理由は、個人的に会ったゼデキヤに対し、個人的な預言を彼に行なったからです。今、バビロンに抵抗しているけれども、バビロンは攻め取ります。そしてゼデキヤは、逃げますが、捕まってしまう。そしてネブカデネザルと面と向かって会うことになります。そしてバビロンに連れて行かれます。これらのことが起こったことは、列王記第二 25 章 4-7 節に書いてあります。そこで幽閉されていますが、5 節にあるように、主が彼を顧みられるようです。エレミヤ 34 章 4-5 節によると、剣で死ぬことはないし、人々に自分の死を悲んでもらえる、つまり尊ばれる形で死ぬことができるという約束が与えられています。

2C 代金の支払い 6-15

34 章以降に、ゼデキヤの治世についてじっくりと見ていきますが、ここ 32 章では焦点はその後

です。このように、バビロンがユダを攻め取るとはっきりと預言している時に、主がとんでもない命令をエレミヤに与えられます。

32:6 そのとき、エレミヤは言った。「私に次のような主のことばがあった。32:7 見よ。あなたのおじシャルムの子ハナムエルが、あなたのところに来て、『アナトテにある私の畑を買ってくれ。あなたには買い戻す権利があるのだから。』と言おう。32:8 すると、主のことばのとおり、おじの子ハナムエルが私のところ、監視の庭に来て、私に言った。『どうか、ベニヤミンの地のアナトテにある私の畑を買ってください。あなたには所有権もあり、買い戻す権利もありますから、あなたが買い取ってください。』私は、それが主のことばであると知った。

「私は、それが主のことばであると知った。」と言っていますから、彼ははじめ、主の言葉を聞いた時、それが本当に主からのものなのかどうか確信を持っていませんでした。主が彼にどう語られたのか分かりませんが、現代の私たちにも主は心の中に何らかの思いを置かれて、それでそれが実際にそうなるのを後で見て、これは主からのものだったのだと確認することができる事がありますね。使徒ペテロは、天からの幻、風呂敷に汚れた獣が入っていて、屠りなさいと命じられた幻について、確信が持てませんでした。そのコルネリオから使いが来て、ついていって、それが主の御心であることを知りました。

アナトテはエレミヤの出身の町です。そこに、従兄弟ハナムエルがいて、土地を買い戻してほしいと願っています。これは、「近親の者による土地の買い戻し」という神の教えです。主が彼らに与えられた土地は、それを所有しつづけなければならない、というものです。ですから、自分が貧しくなってもそれを手放してはいけません。そのために主は、貧しくなった時に一番近い親戚、近親者がそれを買い取って、その土地が他者の手に渡らないようにさせたのです(レビ 25:23 以降)。有名な話として、ルツ記がありますね。ルツの姑ナオミの近親者ボアズが、ナオミの亡き夫エリメクの名を残すために、その土地を買い戻しました。そして同時に、エリメクの子孫を残すために、律法にしたがってルツを自分の妻にしたのです。

32:9 そこで私は、おじの子ハナムエルから、アナトテにある畑を買い取り、彼に銀十七シケルを払った。32:10 すなわち、証書に署名し、それに封印し、証人を立て、はかりで銀を量り、32:11 命令と規則に従って、封印された購入証書と、封印のない証書を取り、32:12 おじの子ハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、監視の庭に座しているすべてのユダヤ人の前で、購入証書をマフセヤの子ネリヤの子バルクに渡し、32:13 彼らの前で、バルクに命じて言った。32:14 『イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。これらの証書、すなわち封印されたこの購入証書と、封印のない証書を取って、土の器の中に入れ、これを長い間、保存せよ。32:15 まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。再びこの国で、家や、畑や、ぶどう畑が買われるようになるのだ。』と。」

購入手続きについてですが、購入証書があります。不動産の権利証書です。巻き物になっており、それを巻いて蠟で封印します。そしてその写しも用意します。こちらは封印しないでおきます。そしてもちろん土地の金額を支払って、これらを証人の前で行なって、売買成立です。エレミヤは監禁の庭の中で行ないました。そしてバルクに命じました。バルクはエレミヤの口述の預言を書き記する人です。後でも何回も出てきます。

「土の器」とありますが新共同訳では「素焼きの器」です。ちょうど死海文書のことを思い出していただければよいでしょう。紀元前 100 年ごろに壺の中に入れておいた写本が、1940 年代に発見されたのです。それだけ長く保管することができます。そして長い期間を経た後に、この証書をもって土地の所有権を行使することができるようになる。そのようにこの土地が再びイスラエル人の手に戻る、という預言を行なったのです。

2B 祈り 16-44

1C ついてゆかない知性 16-25

32:16 私は、購入証書をネリヤの子バルクに渡して後、主に祈って言った。32:17 「ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。

エレミヤが、自分の知性が付いていかないままで、主の言葉が与えられたのでそのまま行動に移し、預言を行なったということがここからよく分かります。「ああ、神、主よ。」と言っていますね、「言ってしまった」あるいは「やってしまった」ということです。今、土地はすべてバビロンの手に渡されているのです。エルサレムは包囲されて、これから破壊されるのです。土地を購入したところで、その売買はまったく無意味になるのです。そこで彼は祈り始めました。

これが信仰であり、信仰にともなう行動です。目に見えるところでは全く意味のないこと、時に愚かで、理屈に合わないことを、主に示されたという理由だけで行動に移します。私たちがクリスチャンになる、ということからその信仰による歩みは始まりました。皆さんはこうお考えになったことはないでしょうか？ 私がそうでした。「福音にしたがって、イエス様を自分の主として、イエス様に従っていこう。」と決断して、教会の人々にもその信仰を告白します。その後で、「ああ、とんでもないことを私はしてしまった。これは、一時的な感情ではなく、自分の残りの生涯を 180 度、変えてしまうものだ。」と私は思いました。

信仰によって行動に移したのですが、知性が追いついていかないのです。自分の知性に頼るのではなく、祈りと信仰によって生きるしかなくなるわけです。まずエレミヤは、いま自分が肉眼で見ている状況から目を離し、主ご自身を見つめるよう努力しています。主の全能ある力に目を留めています。自分が行なっていること、すなわち将来のために土地を購入したことが、どんなに滑稽に見えても、主によって出来ないことは何一つないという事実を見つめています。

32:18 あなたは、恵みを千代にまで施し、先祖の咎をその後の子らのふところに報いる方、偉大な力強い神、その名は万軍の主です。32:19 おもんばかりは大きく、みわざは力があり、御目は人の子のすべての道に開いており、人それぞれの生き方にしたがって、行ないの結ぶ実にしたがって、すべてに報いをされます。32:20 あなたは今日まで、エジプトの国で、イスラエルと、人の中で、しるしと不思議を行なわれ、ご自身の名を、今日のようにされました。32:21 あなたはまた、御民イスラエルを、しるしと、不思議と、強い御手と、伸べた御腕と、大いなる恐れとをもって、エジプトの国から連れ出し、32:22 あなたが彼らの先祖に与えると誓われたこの国、乳と蜜の流れる国を彼らに授けられました。

主がご自分の栄光をモーセに現わされた時に、これがわたしの名であると語られたのが、これです。恵みを千代にまで及ぼし、罰は三代、四代に、という言葉です。主は確かに罰せずにおかない方です。正義の神です。けれども、その正義は圧倒的な神の恵みに支えられています。そして、「おもんばかり」は謀(はかりごと)のことですが、主がお考えになっていることは、私たちが意図し、企画することよりも、遥かに高い所にあります。その中で、人々に公平に報いてくださいます。そして、さらに、ご自分の選ばれた民には特別な計らいを持っておられます。イスラエルに対して、出エジプトにおいて、また約束の地にまで導かれてご自分の愛を示されました。

32:23 彼らは、そこに行って、これを所有しましたが、あなたの声に聞き従わず、あなたの律法に歩まず、あなたが彼らにせよと命じた事を何一つ行なわなかったのです、あなたは彼らを、このようなあらゆるわざわいに合わせなさいました。32:24 ご覧ください。この町を攻め取ろうとして、壘が築られました。この町は、剣とききんと疫病のために、攻めているカルデヤ人の手に渡されようとしています。あなたの告げられた事は成就しました。ご覧のとおりです。32:25 神、主よ。あなたはこの町がカルデヤ人の手に渡されようとしているのに、私に、『銀を払ってあの畑を買い、証人を立てよ。』と仰せられます。」

そして、エレミヤは主がバビロンを起こして、エルサレムを攻めるようにされていることにも理解を持っていました。事実、「剣とききんと疫病」によってエルサレムの中が侵されていたのも確認しています。これらは主が語られたことです。しかし、「銀を払ってあの畑を買い、証人を立てよ。」という命令がさっぱり理解できないのです。バビロンに取られてしまうこの土地を、どうして買い戻す意味があるのか、ということです。

2C 不可能のない神 26-44

1D 怒り 26-35

32:26 エレミヤに次のような主のことばがあった。32:27 「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」

エレミヤが最初に祈ったこと、神にとって出来ないことは何一つない、という真理を確認してくださ

っています。私たちはこの真理を信じて、それで行動に移しても、その状況がその通りにならず、エレミヤのように迷うときがあります。けれども、その時に祈ってみてください。神は、同じ言葉をもって私たちの心に確証してください。

32:28 「それゆえ、主はこう仰せられる。見よ。わたしはこの町を、カルデヤ人の手と、バビロンの王ネブカデレザルの手に渡す。彼はこれを取ろう。32:29 また、この町を攻めているカルデヤ人は、来て、この町に火をつけて焼く。また、人々が屋上でバアルに香をたき、ほかの神々に注ぎのぶどう酒を注いで、わたしの怒りを引き起こしたその家々にも火をつけて焼く。

主は、エレミヤの祈りにあったように、バビロンの手にエルサレムを渡されます。エルサレムの町の屋根は、ちょうどバルコニーのように平らになっています。そこで一日の仕事を終えてゆっくりしたり、昼間は洗濯物を干したり、居住空間の一部となっています。そこにエルサレムの人々は、バアルの像を置き、それを拝んでいたのです。

32:30 なぜなら、イスラエルの子らとユダの子らは、若いころから、わたしの目の前に悪のみを行ない、イスラエルの子らは、その手のわざをもってわたしの怒りを引き起こすのみであったからだ。…主の御告げ。…32:31 この町は、建てられた日から今日まで、わたしの怒りと憤りを引き起こしてきたので、わたしはこれをわたしの顔の前から取り除く。32:32 それは、イスラエルの子らとユダの子らが、すなわち彼ら自身と、その王、首長、祭司、預言者が、またユダの人もエルサレムの住民も、わたしの怒りを引き起こすために行なった、すべての悪のゆえである。

「若いことから」です。一時的ではなく、長いこと引き続き行なっていたので、習慣になりそれを捨てるという考えさえも起こしませんでした。具体的にはエルサレムの町を建てたダビデの子ソロモンの晩年から、すでに偶像礼拝は始まりました。そして一部の者たちだけでなく、あらゆる社会的地位にいる人々が行なっていたのです。

32:33 彼らはわたしに、顔ではなくて背を向け、わたしがしきりに彼らに教えるが、聞いて懲らしめを受ける者もなく、32:34 わたしの名がつけられている宮に忌むべき物を置いて、これを汚し、32:35 わたしが命じもせず、心に思い浮かべもしなかったことだが、彼らはモレクのために自分の息子、娘をささげて、この忌みきらうべきことを行なうために、ベン・ヒノムの谷にバアルの高き所を築き、ユダを迷わせた。」

主は、やみくもに怒りを示されたのではなく、むしろ彼らが神の語りかけを頑なに拒んでいるから、このようなことが起こるのを許されていると言えます。そして、主が忍耐して語りかけを行なわれていたのに、何と彼らは、モレクに対する幼児犠牲まで行ない始めました。モレクはモアブ人の神でしたが、それを自分たちがカナン人から取り入れていたバアル信仰の中に加えて入れて、そして自分の望まない妊娠を、このような形で処理していたのです。

2D 回復 36-44

32:36 それゆえ、今、イスラエルの神、主は、あなたがたが、「剣とききんと疫病により、バビロンの王の手に渡される。」と言っているこの町について、こう仰せられる。32:37 「見よ。わたしは、わたしの怒りと、憤りと、激怒とをもって散らしたすべての国々から彼らを集め、この所に帰らせ、安らかに住ませる。

ここで大事なものは、「それゆえ」という言葉です。主が十分にエルサレム破壊によって、ご自分の怒りを示されました。憤りを示されました。ゆえに、これからは回復と癒しと平安の計画を実行されるのです。しかし、怒りを満たされたからこそ、平和を確立されます。ですから十字架は私たちの平和なのです。キリストの十字架において、神の怒りが満たされました。ゆえに、そこには神の強い意志が、私たちが神に立ち帰らせる意志があるのです。

このように、罪が犯されたところに、主が恵みを降り注がれます。「もしひとりの違反によって多くの人が死んだとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、多くの人々に満ちあふれるのです。(ローマ 5:15)」

32:38 彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。32:39 わたしは、いつもわたしを恐れさせるため、彼らと彼らの後の子らの幸福のために、彼らに一つの心と一つの道を与え、32:40 わたしが彼らから離れず、彼らを幸福にするため、彼らとこしえの契約を結ぶ。わたしは、彼らがわたしから去らないようにわたしに対する恐れを彼らの心に与える。32:41 わたしは彼らを幸福にして、彼らをわたしの喜びとし、真実をもって、心を尽くし思いを尽くして、彼らをこの国に植えよう。」

イスラエルに対する神の新しい契約の内容です。人の問題は「心」にありました。律法を守り行なおうと思う意志はあっても、肉はそれに違反することを行なわせませぬ。外側の行ないを変えようとしても、心が変わらなければ何もできないのです。石の板に神が律法を書き記す古い契約とは違って、心の板に書き記してくださるというものです。そして興味深いことに、41 節には「心を尽くして思いを尽くして」というのは主ご自身がなされることです。この表現が来たら、「主なる神を愛しなさい」という命令を思い出すと思います。申命記にある律法であり、イエス様がもっとも大事な律法の一つとして取り上げられました。けれどもここでは、心を尽くして思いを尽くしているのは私たちではなく、神ご自身です。神がユダヤ人をイスラエルに植えてくださるのを、心と尽くして思いを尽くして行なってくださいというのです。

32:42 まことに、主はこう仰せられる。「わたしがこの大きなわざわいをみな、この民にもたらしたように、わたしが彼らに語っている幸福もみな、わたしが彼らにもたらす。32:43 あなたがたが、『この地は荒れ果てて、人間も家畜もいなくなり、カルデヤ人の手に渡される。』と言っているこの国で、再び畑が買われるようになる。32:44 ベニヤミンの地でも、エルサレム近郊でも、ユダの町々でも、山地の町々でも、低地の町々でも、ネゲブの町々でも、銀で畑が買われ、証書に署名

し、封印し、証人を立てるようになる。それは、わたしが彼らの捕われ人を帰らせるからだ。…主の御告げ。…」

ここで主は、エレミヤが行なったことは確かに正しいことなんだ、という保証を与えてくださいました。主は私たちに、信仰によって行なったこと、自分が正しいと思って行なったこと、それが間違っているような要素がたくさんあるように見えても、大丈夫だよ、正しいのだよ、と確認してくださいます。

33章にも出てきますが、44節に出てくるイスラエルの地理について説明したいと思います。ここはベニヤミンから南の地域全体について説明しています。ベニヤミンの地はエルサレムの北に隣接する部分ですね。今、エレミヤが購入した土地もベニヤミンにあります。そしてエルサレム近郊、それからユダの町々はその南に広がっています。「山地の町々」というのは、ベツレヘムとかヘブロンとか、山地にある町のことです。イスラエルの国は地中海とヨルダン川の間に挟まれた長細い土地ですね。その真中に山脈が走っています。ですから、エルサレム、ベツレヘム、ヘブロンのあたりは高い山地になっているのです。そして「低地の町々」とあります。ここは「シェフェラ」と呼ばれています。山地の町々と地中海沿岸地域の間にある地域です。ペリシテ人の町々、ガザとかアシケロンとか、地中海沿岸の地域がありますが、もっと内陸に入ったところですよ。ダビデがゴリヤテと戦ったエラの谷はそこにあります。そして南側に「ネゲブ」があります。ベエル・シェバの町から始まり、そこから南下すると一帯が砂漠になります。このように、主は具体的に土地がユダヤ人に戻ってくることを約束してくださいました。

3A 理解を超えた大いなる事 33

それから主が、エレミヤに語られたことを改めてまとめられます。「理解を超えた大いなる事」ということです。

1B 廃墟から喜びへ 1-13

33:1 エレミヤがまだ監視の庭に閉じ込められていたとき、再びエレミヤに次のような主のことばがあった。33:2 「地を造られた主、それを形造って確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。33:3 わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を超えた大いなる事を、あなたに告げよう。

「理解を超えた大いなる事」です。ここヘブル語の元々の意味は「囲いがあって立ち入ることができない」です。城壁があって町の中に入ることができないがごとく、人間には到底測り知ることのできない思いを、神はご計画や、はかりごとの中に抱いておられるということです。バビロンに滅ぼされる、廃墟となるエルサレムを目前にして、人々が帰って来る、安心して住むようになると言われたら、夢物語になります。しかし、主は「その理解を超えたことを、わたしはするのだ。」と言われるのです。

そして、「わたしを呼べ。そうすれば」とあります。主は一貫して、これを限られた、ご自分と親しい関係を持っている者たちだけに示されました。例えば、アブラハムに対して主の使いは、「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。アブラハムは必ず大いなる強い国民となり、地のすべての国々は、彼によって祝福される。(創世 17:17-18)」と言われました。ダビデも、「あなたは、ご自分の約束のために、あなたのみこころのままに、この大いなることのすべてを行ない、このしもべにそれを知らせてくださいました。(2サムエル 7:21)」と祈っています。そしてイエス様が弟子たちに対して言われました。「これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現わしてくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。(ルカ 10:21)」主は、ご自分の弟子たちにもこのように、大いなること、理解を超えたことを示してくださいます。

33:4 まことにイスラエルの神、主は、壘と剣で引き倒されるこの町の家々と、ユダの王たちの家々について、こう仰せられる。33:5 彼らはカルデヤ人と戦おうとして出て行くが、彼らはわたしの怒りと憤りによって打ち殺されたしかばねをその家々に満たす。それは、彼らのすべての悪のために、わたしがこの町から顔を隠したからだ。33:6 見よ。わたしはこの町の傷をいやして直し、彼らをいやして彼らに平安と真実を豊かに示す。33:7 わたしはユダの捕われ人と、イスラエルの捕われ人を帰し、初めのように彼らを建て直す。33:8 わたしは、彼らがわたしに犯したすべての咎から彼らをきよめ、彼らがわたしに犯し、わたしにそむいたすべての咎を赦す。33:9 この町は世界の国々の間で、わたしにとって喜びの名となり、栄誉となり栄えとなる。彼らはわたしがこの民に与えるすべての祝福のことを聞き、わたしがこの町に与えるすべての祝福と平安のために、恐れおののこう。」

すばらしいですね、主は裁きを行なわれた後に、段階的に回復を行なわれます。彼らが犯した罪によって自らを傷つけた、その傷を癒されます。それから平安と真実で豊かに示されます。それから、捕われ人は帰されます。そして、「初めのように彼らを建て直す」とあります。これは、ダビデがエルサレムで王座を占めた時の、その姿にです。そして、彼らの咎をすべて清められます。そして、世界中の人々がエルサレムのことを聞いて、その祝福と平安について聞いて、畏れ敬うようになります。シェバの女王がソロモンの知恵と栄華を聞いて、主をほめたたえたのと同じでしょう。

33:10 主はこう仰せられる。「あなたがたが、『人間も家畜もいなくて廃墟となった。』と言っているこの所、人間も住民も家畜もいなくて荒れすたれたユダの町々とエルサレムのちまたで、33:11 楽しみの声と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、『万軍の主に感謝せよ。主はいつくしみ深く、その恵みはとこしえまで。』と言って、主の宮に感謝のいけにえを携えて来る人たちの声が再び聞こえる。それは、わたしがこの国の捕われ人を帰らせ、初めのようにするからである。」と主は仰せられる。33:12 万軍の主はこう仰せられる。「人間も家畜もいなくて廃墟となったこの所と、そのすべての町々に、再び、群れを伏させる牧者たちの住まいができる。33:13 この山の町々でも、低地の町々、ネゲブの町々、ベニヤミンの地、エルサレム近郊、ユダの町々でも、再び群れが、数を数え

る者の手を通り過ぎる。」と主は仰せられる。

ここでも同じです。家畜の群れについて、また人について、廃墟となって荒れ廃れたその場所に、主が再び人と家畜であふれさせてくださるということです。私たちが負い目として持っていたそのところに、恵みが満ちあふれるのです。「罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」そしてそこに、喜びがあります。それは主への感謝にある喜びです。そして先ほどもでてきましたが、具体的な地域も記されています。ベニヤミンから南にある地域一帯です。それから「数を数える者の手」というのは、羊飼いの手です。イエス様はご自分のことを「羊の門」と言われたことがありますが、それは羊が囲いに帰ってくる時に、門のところに杖を横にして羊を一匹ずつ入らせるようにさせます。そして数をかぞえるのです。

2B 永続するダビデの王座 14-26

33:14 「見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家に語ったいつくしみのことばを成就する。33:15 その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を芽生えさせる。彼はこの国に公義と正義を行なう。33:16 その日、ユダは救われ、エルサレムは安らかに住み、こうしてこの町は、『主は私たちの正義』と名づけられる。」

イエス・キリストの預言です。エレミヤ書 23 章にもすでに「正しい若枝」という預言がありました。そして、「主は私たちの正義」という名前も出てきました。ヤハウェなる神は、ご自分の民の必要になってくださる方です。戦いで勝利が必要なおときには「ヤハウェ・ニシ(主は旗)」、心の平安が必要な時には「ヤハウェ・シャローム(主は平安)」です。今のエルサレムに最も必要なのは、公義と正義です。ですから主が「私たちの正義」になってくださるのです。

ここ 15 節には、「正義の若枝」という名称が変わっています。23 章の「正しい若枝」は、若枝そのものが正しいことを強調していますが、正義の若枝は、「正義を与えるところの若枝」という意味合いがあります。つまり、正しい方が、その義を与えてくださるということです。恵みによって義と認めてくださる、ということです。「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。(2コリント 5:21)」

33:17 まことに主はこう仰せられる。「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。33:18 またレビ人の祭司たちにも、わたしの前で全焼のいけにえをささげ、穀物のささげ物を焼き、いつもいけにえをささげる人が絶えることはない。」

主はダビデに、「あなたから世継ぎの子が出る」との約束を与えられました。それは決して途絶えることはない、ということ。約束は破棄されたものではありません。エコヌヤ(エホヤキン)に対して、「彼の子孫のうちひとりも、ダビデの王座に着いて、栄え、再びユダを治める者はいないからだ。(エレミヤ 22:30)」と主は言われましたが、イエス・キリストはエコヌヤの子孫ヨセフの子であるだけ

でなく、ダビデの息子ナタンからの子孫マリヤの子であります。主が再び来られて、ダビデの座に着いてくださいます。

そしてレビ人ですが、これは理解できないと思われる人が多いと思います。イエス・キリストがただ一度死なれたことにより、罪のいけにえは果たされたはずなのに、なぜ再び動物のいけにえの制度が始まるのか？ということです。けれども、千年王国ではいけにえの意味が変わりません。それは、キリストが成し遂げられた罪の贖いを記念して行なうものであり、実際に罪を贖うためにささげるものではないからです。ちょうど私たちが今、聖餐式においてキリストの死を記念するように、これら動物のいけにえ、また穀物のささげ物によって主がなされたことを記念します。このようにして、今、王も取り除かれ、神殿も破壊されるので祭司たちもいなくなります。しかし、主は必ず廃れることはない約束しておられます。

33:19 エレミヤに次のような主のことばがあった。33:20 「主はこう仰せられる。もし、あなたがたが、昼と結んだわたしの契約と、夜と結んだわたしの契約とを破ることができ、昼と夜とが定まった時に来ないようにすることができるなら、33:21 わたしのしもべダビデと結んだわたしの契約も破られ、彼には、その王座に着く子がいなくなり、わたしに仕えるレビ人の祭司たちとのわたしの契約も破られよう。33:22 天の万象が数えきれず、海の砂が量れないように、わたしは、わたしのしもべダビデの子孫と、わたしに仕えるレビ人とをふやす。」

先ほどの新しい契約と同じです。ダビデへの契約がなくなるものなら、夜昼の定めもなくなるほど、決してなくなるのだということです。そして、多くの人々が王族からも祭司職からも出てきます。

33:23 エレミヤに次のような主のことばがあった。33:24 「あなたは、この民が、『主は選んだ二つの部族を退けた。』と言って話しているのを知らないのか。彼らはわたしの民をもはや一つの民ではないと見なして侮っている。」33:25 主はこう仰せられる。「もしわたしが昼と夜とに契約を結ばず、天と地との諸法則をわたしが定めなかったのなら、33:26 わたしは、ヤコブの子孫と、わたしのしもべダビデの子孫とを退け、その子孫の中から、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫を治める者を選ばないようなこともあろう。しかし、わたしは彼らの捕われ人を帰らせ、彼らをあわれむ。」

ここでは、イスラエルとユダを二つの部族として語っておられます。彼らが退けられた、ということ、エルサレムの破壊によって語られていくことについて、神ご自身が断じてそのようなことはない、と繰り返しておられます。主の憐れみは必ずその通りになることを、天地の法則が変わらないのと同じように確実であることを教えておられます。「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。(ローマ 11:1)」そして、この神の真実は、異邦人にも向けられており、私たちも変わらない神の憐れみによって支えられているのです。

私たちは、古い人は裁かれます。しかし、その十字架のところにキリストの命があります。